

豆行司

竹本織太夫

もう十年も前のことになるでせうか、大毎主催の全國中等學校相撲大會が堺の大濱にあつた時の事でした。八、九才位の可愛い、豆行司が出て来て軍配さばきも鮮やかに振舞つた勝負がありました。この勝負がまたどうしたわけか、もつれにもつれた勝負で、豆行司の擧げた軍配に物云ひがつき、取なほしになつたのです。いはゞ行司の間違ひといふわけなのです。

ところが、この時、その可愛い豆行司は土俵に突つ立つたまゝ、兩方の眼からポロリポロリと大粒の涙を流して泣いてゐるではありませんか。その時の悲壯な口惜しさうな顔は今だに私の瞳に灼きついてをります。

とにかく、かうした経緯でこの一番

は取り直しになつたのですが、その取り直した勝負も、やはり前の勝負と同様に豆行司のあげた軍配の關取の勝ちになつた。即ち結果から見て取り直しの必要がなかつたわけなのです。この時の豆行司の嬉しさうな顔、以前の口惜しさうな表情に比べて、なんと自信にかゝやいた晴れやかな顔、ワーツと全觀衆も總立ちになつて喜びました。

私はその瞬間、この豆行司の表情から大きな教訓を得ました。この豆行司は小さいながらも自分の軍配に全身全靈を打込んで、責任を持つて審判してゐたのです。そのいはゞ自分の判斷に對する信念を傷つけられた、誇を踏みにじられたことに、何んともいへない口惜しさ、悲しさを感じた。然もその自ら信ずる信念の強さは取直しの勝負が前と同じ勝負に結果した時の誇らしげな表情に現れてゐたのです。相撲は勝負事ですが、藝道も同じです。この豆行司の示したやうな己れの藝に對す

る信念と執着、自分の藝の成功不成功に涙を流すほどの藝術家的な良心の持主が果して今日の文樂に幾人ゐるでせうか。私も私自身を省みて恥しい次第だと思つてゐます。十歳にも足らぬ豆行司に大きなものを訓へられました。

かつて吉右衛門さんが相撲の稽古場を見學に行かれた時のお話ですが、その時「あれほど激しい悲惨な感じさへも受けるこの稽古があつてこそ、あれ程の土俵が見られるのだ。芝居は相撲と違つて見た目ですぐと勝負がわからぬけれど、もしも勝負がすぐとわかるものなら、私など毎日黒星ばかりだ」といはれたさうです。

私の師匠の古靱太夫は今日文樂座の櫓下ですが、それでゐても、随分手馴れた語り物の時ですら、稽古はまるで素人のやうに最初の一から始められます。これには潜越ながら、いつも感心させられてをります。吉右衛門さんの「私は毎日黒星」と思ひ合せて、さすが

に名人と呼ばれる方々の心掛けは違つたものだと思つて存じます。

自分の信念に泣いた豆行司のひたむきな氣持、已れを信する強さ、舞臺の上の藝も土俵の上の勝負と同様にいつも眞剣であるべきです。十年前のこの先さな豆行司が私の藝に對する悟道の先達だつたのです。(文樂座)

延若と五郎

中村伸郎

東京在の我々に鷹治郎の上京が絶えぬ寂しさもそろ／＼忘れかけてきた。演劇史に大きな足跡をのこすと信じてゐる曾我酒家五郎びいきの私は、彼の來訪を又楽しみの一つとしてゐる。それにしては鷹治郎華やかにし頃からの私のひいき役者延若はどこへ行つたのだらう。關西の情勢に暗い私にも、彼の昨今は關西でも不振の様にきく。不思議な氣がする。何か不人氣と云ふ點でもあるのか、それとも彼の無氣

力のいたすところかしら。

延若の世話物の寫實の演技は、特に私の魅力を感じるものだつた。菊五郎にもないあの執拗な寫實の追究、だゞ子の子の様な發散、それから粘りは、世話物の人物描寫に遺憾なかつた。

彼の世話物の演技を菊五郎のそれに比較すれば、菊五郎のそれは現代人の生活感情に翻譯しすぎた割り切れである。つまり延若の世話物の演技には、歌舞伎の傳統臭が残されてゐると云ひたいのである。

菊五郎の立場は別論として、延若の行き方の正しさは論を待たまい。役者無人の今日に於てはことに……。その延若の不振は……。私は彼の奮起を切望して止まない。

曾我酒家五郎劇團の存在は偉とすべきである。演劇運動としての劇團統率の熱意と大衆の把握が今日の成功をもたらししたものとして敬服してゐる。殊に日本唯一の貴重な喜劇運動と私が云ひたいのは、一介魚人自身の根強い構成を

持つあの劇の獨自さである。

關西の人々は五郎をどう見てゐるのか、我々東京人にとつては、彼の來訪を、頼もしい彼の健在を喜び迎へるまで食ひ込んでゐることをはつきり感じてゐる。

彼の劇團の獨自の根強さは、どうにも不可解な女型をでつち上げもしてゐる。あれまでうけ入れる譯にはゆかないが、また五郎の首振り人形の演技、目まぐるしい目ばたきも氣にならないではないが、俳優としての五郎の演技には見るべきものあり、何よりの魅力は一座の大坂辯のもつ生活臭と、いくつかの型を抜け出さないせよ涙の喜劇、快笑劇、痛快劇の獨自のそれ／＼の見本である。

歌舞伎が傳統の力を借り、新劇が文學としての戯曲の蔭にちよこまり、或は思想の力を楯にとつてゐる今日、曾我酒家五郎が、率直に芝居の娛しきで正面を切つてゐる演劇運動の正しさと成功は、私のつねに尊敬してゐるところである。

(文樂座)